

「私家集全積叢書」を読む

—— 古典文法研究の立場から ——

小田 勝

○ はじめに

古典文学研究と古典語学研究は、古典文読解のための両輪である。研究の進んでいる『源氏物語』などでは、文学の側から優れた校訂本文、注釈、「読み」の提示がなされ、語学側からは解釈文法という形で、付属語や敬語、構文、句型の解釈法が示されて、両者の間に理想的な関係が成立していると思う。ところが歴大に存する中古・中世の私家集については、文学側で注釈・研究の歴史が浅いらしく、また語学側でも私家集の用例を集中的に用いた古典文法研究というような事例がほとんど無く、両者は今のところ没交渉であるようにみえる。

ところで、風間書房刊の「私家集全積叢書」の一冊に『清原元輔

集全積』という注釈書があり、これを一読したところ、「行き隠れなで」の「な」が打消の助動詞「ぬ」の未然形であるとか（別の箇所では「なで」は「無^なで」であるという説明もある）、「つきせぬものは……数にざりける」の「ざり」が打消であるとか、「経」の説明に「経る」（上二段）とあるとか、奇妙な説明が続々と出て来て驚倒することであった。語学書ではないし、大人げないことかもしれないが、公刊されたものである以上、古典文法研究者としては看過できず、やはりきちんと取り上げてコメントするのが責務であろうと考えた。たまたまこの一冊がこのような状況なのであって、「私家集全積叢書」の他の巻が同様の状況であるはずはないが、考えてみれば今まで私家集の注釈書に対して古典語学の側からコメントがなされたことはほとんどなかったと思われる。このような状況は望ましいことではないと思うので、本稿では、現在第39巻（『紫

式部集全釈」まで刊行されている「私家集全釈叢書」の1『赤染衛門集全釈』と24『深養父集・小馬命婦集全釈』の二十四冊をとりあげて、語学の立場から疑点や注意される点を指摘し、現在の私家集の注釈書が古典文法研究者にどのように見えるものであるかを示そうと思う。

私はこの叢書から多大な恩恵を受けている者であり、これを高みに立って批評するなどという気持ちはもとよりのない。単に古典文法に合致しない説明に疑念を示したものである。例えば、「さす」を「使役の助動詞「さす」の連体形」と説明されると(1『赤染衛門集全釈』の二三番歌の語釈)、それは違うだろう、ということである(助動詞「さす」の連体形は「さする」)。

同叢書の歌番号と本文を、同書掲示のまま掲げ(必要に応じて詞書も掲げた)、疑問のある注、通釈の施されている箇所には傍線を付した。「…」は本文を省略したことを示す。本文中で『日本国語大辞典』第二版』を「日国」と略称した。

1 8 『清原元輔集全釈』と24 『深養父集・小馬命婦集全釈』について

8 『清原元輔集全釈』(藤本一恵、一九八九年八月)と24 『深養

父集・小馬命婦集全釈』(藤本一恵・木村初恵、一九九九年八月)は語学上誤った説明がたいへん多いので、まず一覽にしてこれを示す。

8 『清原元輔集全釈』

正保版歌仙家集本・四 吹く風は涼しかりけり草しげみ露のいたら
ぬ萩の下葉も

語釈に「涼しかり」は形容詞終止形」とあるが、連用形である。六六 あしまよふ綱手の舟のさはりおほみ乗りてゆくべきほどのはるけさ(詞書「おほみのといふ所を、人に代りて」)

詞書の「おほみの」(底本の「おほみ」を訂している)を「近江野」とみ、語釈で「多みに」「近江」を隠題とする」というが、「おほみ」に「あふみ」を掛けるのは、平安時代の元輔には無理である。

一〇四 露のわくよをぞうらむる菊の花さかりの色のひとりならねば

語釈で「うらむる」を「他動詞下二段「恨む」の連体形」とするが、上二段である。一一三番歌の「しのばざりけり」の語釈「しのぶ」自動詞下二段・四段」も「上二段・四段」の誤りである。

一〇八詞書 おなじ国章がめ、死に侍りしましたのとし、き日ひにつかはしける

同じ底本の翻刻である新編国歌大観に「き日ひにつかはしける」とあるから、底本の「日」は漢字表記なのだろう。これに「ひ」と振り仮名を付け、語釈でも「き日 忌日きひ」とするが、これは「きにち」と読むのではなからうか（「きひ」は『日国』不載語彙であり、「きひ」という語が存するなら根拠がほしい）。

一一四 うき世にはゆきかくなでさかしらにふるは心の外にもあるかな

語釈で「な」を「打消の助動詞「ぬ」の未然形」とするが、完了の助動詞「ぬ」の未然形である。

一二二 年へにし人の形見の藤衣すてやしてけんまたやかけたる
語釈で「て」を「接続助詞」とするが、完了の助動詞「つ」の連用形である。

一五〇 花桜あかぬ匂ひのすぎうくて千年へぬべし青柳の糸

語釈に「へぬ」は、「経ぬ」の掛詞。「経る」(上二段)は経過する。「経る」(上二段・下一段)は経糸を整えて機はたに掛ける」とあるが、「経」も「経」も下二段である。一五六番歌の注でも「経」(下二段「経る」の連用形)などとある。

一五一 琴の音も池のそこひも大空のさやけき月にひかれてぞすむ

語釈で「ひか」を「連用形」とするが、未然形である。

一八七詞書 …ゆきむらがれて梅さかずといふ事をよみ侍りしに
語釈に「むらがる」は自動詞四段が普通で、「むらがれ」という下二段の用例は他に見つからない」とあるが、『日国』の「むらがる」には、「□(自ラ下二)」として、下二段の用例が四例掲示されている。

二二五 おぼろけにむすびしつとも思はねばいかでかるべき森の下草

語釈に「か」は反語」とあるが、「か」という語はない。

二四四 君わかみ我が身おいぬるわかれこそしばばかりと思ひなされね

語釈で「れ」を「受身」とするが、可能であると思う。また、「底本―思ひなされぬ」「こそ」の結びとして連体形での「ぬ」は古い形」とあるが、上代の「こそ…連体形」の句型は形容詞の場合である。

二四九 七夕にあふよしもがな天の川けふを契りていく夜すぎぬと
語釈に「もがな」連語。副助詞「も」に終助詞「がな」のついたもの」とあるが、本体は「もが」なのであって、「もが」に「な」が付いているのである。これを「も+がな」とする説明は

1 『赤染衛門集全釈』一六六番歌語釈、12 『相模集全釈』二七三

番歌語釈にもみえる。

二五六詞書 筑紫にてたがはのみかどに、ぼだいずたてまつりあげらるるに

通釈の「筑紫で田川の御門に、菩提樹を奉納いたしました時に」は無理である。この詞書が表している状況がよく解らないが、この「らるる」はいわゆる「公尊敬おんけいのようにみえるが、いかがだらう。

前田尊経閣蔵本・三三三 松風にたぐふ木の葉の散りつめばときはの山ぞかすまざるらし

五十の賀の屏風歌である。第五句を「霞まざるらし」と読んでいるが、これは「かすまざるらし」と読むのではなからうか。

一二六 千代ふともつきせぬ稲のたねなれば苗代水はなしろみづにまかせてを見む

語釈に「を」係助詞」とある。何かお考えがあるのかもしれないが、通説では間投助詞である（一二三番歌の語釈では、同様の「を」を間投助詞としている）。

一四五 しぐれつつ別れがたきにたちつればゆきもやらぬものにぞありける

語釈で「れ」を「受身」とするが、可能であると思う。

一四八 露けくもなりまさるかな桜花もとの下草はらふ人なみ

語釈に「人なみ」人波。人の群。群集のおしあっている様を波にたとえていう語」とし、「爛漫と咲いた桜花の下で何人も人が下草刈りをしているさまを詠んだもの」とするが、この「人なみ」は「人がいないので」の意ではないか（『日国』のあげる「人波」の最古例は、坪内逍遙の『当世書生氣質』(1885)である）。

一四九 あやめぐさねもかはらねどほととぎすおどろかれぬるこのふる声

語釈で「れ」を「受身」とするが、自発であると思う。また「ふる声」について、「ふる」旧る。自動詞上二段」と説明するが、「古声」で「語の名詞であって、語構成を説明するなら、「ふる」は形容詞「古し」の語幹とすべきであらう。

一七六 百敷にうつるふこともなでしこのものと垣根をあせじとぞおもふ

通釈に「根もとの垣根を色あせないようにしたいとおもう。」とするが、「褪せ」を下二段の他動詞とするなら孤例となる（『日国』不載）。「褪す」は自動詞とみて、「もとの垣根を」は「おもふ」に係ると考えるべきではなからうか（つまり下の句は「根もとの垣根を、色褪せないだろうと思う」の意）。また、「なでしこの」について、語釈に「無なで」と「なでしこ」の掛詞。「無なで」は

「なくて」の意」とするが、「無で」という語形はないので、「無」と「なでしこ」の掛詞とすべきであろう。

書陵部藏桂宮丙本・二一四 惜しとおもふ心は糸に縊られなむ散る

花ごとぬきてとどめむ

語釈で「れ」を「可能」とするが、受身であると思う。

二一五 卯の花にうちみえまよふゆふしでてけふこそ神をまつるべ
らなれ

上の句の通釈「卯の花に見ちがえる真白の木綿ゆふし四手で」は、「卯の花に見ちがえる真白の木綿を垂らして」とした方がよいと思う。

二五四 かずふればつきせぬものはわがつめる稲と年との数にざり
ける

語釈で「ざり」を「打消の助動詞」「ざり」の連用形」とするが、この「ざり」は「ぞあり」の約まったものである。

24 『深養父集・小馬命婦集全釈』

深養父集・三 春霞なにかくすらむ桜花ちるまをだにもみるべき物
を

語釈で「だに」を「副詞」とするが、副助詞である。

五 あふからも物は先こそかなしけれわかれんことをかねて思へば
(詞書「から桃といふ題を」)

語釈で「わかれ」を「連用形」とするが、未然形である。

二〇 雲井にもかよふ心のおくれねばわかると人に見ゆばかりなり
語釈で「おくれ」を「連用形」とするが、未然形である。

二一 むば玉の夢になにかはなぐさまむうつつにだにもあかぬ心を
語釈で「む」を「終止形」とするが、連体形である。

二四 今のははや恋ひ死なましをあひみんとたのめしことぞ命なりけ
る

語釈で「ん」を「連体形」とするが、終止形である。

三五 浪にのみひたれる松のふか緑いくしほとかはいふべかるらん
語釈に「れ」は受け身の助動詞「る」の連用形」とあるが、四
段動詞「ひたる」の已然形(または命令形)に存続の助動詞「り」
の連体形が付いているのである。連動して、通釈の「専ら浪には
かり浸されている」も誤りということになる(「浸っている」で
ある)。

三九 思ひける人をぞともにおもはましまさしやむくいなかりけり
や

語釈で「まし」を「終止形」とするが、連体形である。

四〇 憂き身には煙なれどもきえなくに空にかくる事のはかなさ
語釈に「なれども」全体を自立語化した接続助詞と考えてもよ
い」とある。言いたいことは、「一語化」ということだろう。

四三 ともすれば立ちなんとするあま雲の空とも人のおもほゆるか

な

語釈で「ん」を「連体形」とするが、終止形である。

五五 ひとりのみおもへばくるしよぶこ鳥声になきつつ君にきかせ

ん

語釈で「せ」を「連用形」とするが、未然形である。

七六 物おもへばいもねられぬをあやくも忘るる事を夢にみるか

な

語釈で「られ」を「連用形」とするが、未然形である。

八三 まさりては我ぞもえける夏虫の火にかかるとなどもどきけ

ん

語釈で「かかる」を「連体形」とするが、終止形である。また、

「けん」を「終止形」とするが、連体形である（和歌で「疑問詞―

終止形」の句型はたしかに存するが、疑問詞が「など」の場合は

必ず連体形で結ぶ）。

小馬命婦集・序文 人のくにせかいもかくやとおもひやらる

語釈で「る」を「受け身」とするが、自発であると思う。

四三 詞書 いしはしにすむ男、「久しくきこえねば」とて

語釈で「きこえ」を「連用形」とするが、未然形である。

四四 とはぬはしうらむるものと思ひせばいくそたびかはいふべか

りける

語釈で「は」を「格助詞」とするが、ふつう「は」は係助詞、

「し」は強意の副助詞（係助詞とも）と説明されるもので、両者

は「はし」の順で承接するのである（例「道はし」「波之」遠く

万葉集・三九七八）。

五九 詞書 堀河殿阿闍梨の君、いたうわづらひ給ふとて、…

語釈で「給ふ」を「連体形」とするが、終止形である。

六一 詞書 堀河のきさきうせさせたまへりし五七日、…

語釈で「り」を「終止形」とするが、連用形である。

二 『私家集全釈叢書』1～7について

以下、「私家集全釈叢書」24巻までの残余の巻（1～7巻、9～23巻）について、語学の立場から気付いた事柄について記す。本節では、1～7巻について、掲示する。

1 『赤染衛門集全釈』関根慶子ほか（一九八六年九月）

一二三 わきてこそおもひかけさすやまのはに我がことだまのつゑもきりしか（正月に、業遠がうづゑして、だいはん所に入れたりにいかなりしつゑのさがりの日かけともたがことだまと見

えもわかれず」ニ対スル業遠ノ返歌)

「さす」を役の助動詞とみて、語釈に「さす」は、役の助動詞「さす」の連体形であるが」というが、連体形は「さする」であって、この「さす」を役とるのは無理である。これは

「思ひヲかけ、日影ガ差す山の端に」と読むのではなからうか。

一二七 我はまだおもひもたらず花桜君やみたけの山もこゆらん

「御嶽」に「見た」を掛ける」とする(和歌文学大系20も)が、いかがであろう。「た」の夙い例といわれる著名な『金葉集』の短連歌「東人の声こそきたに聞こゆなれ(永成法師)／陸奥によりこしにやあるらん(権律師慶範)」(六四八、「北」と「来た」の掛詞といわれる)と同年代なので(慶範は九九七〜一〇六一年、赤染衛門は一〇四一年に八十余歳で存命)、『金葉集』の例を認めるならあり得ないが。一九四番歌も同様である。ただ、この歌も一九四番歌も、「見」が掛けられていると考えてはいけないのだろうか。

一八〇 しづのをのたねほすといふ春の田をつくりますだの神にまかせん

語釈に「丁寧を表す助動詞「ます」に、「真清田」を掛けて」とあるが、丁寧の助動詞「ます」は現代語である。この「ます」は尊敬の補助動詞である。

三二五 すぎすぎていくらばかりかすぎてゆくあまねきかどのしる

しきかなん (詞書「石山にまうでしに、せき山の杉のはつかに見ゆるを、「ちかくなりぬや」と問へば、「杉のあなたはいとほるかに侍る」といひしに))

通釈に「聞きたいものでございます。」、和歌文学大系20も「きかなん」聞きたい」とするが、「聞かなん」を「聞かばや」の意に解するのは無理であろう。「隅々まで行き渡っているしる(＝靈験を約束する) 杉よ、(私の願いを) 聞いてほしい」である。

四九六 詞書 「菊の花をかききところあり」とていぬる人の、おそ
うかへるにいひやる(歌「きくにだに心はうつる花の色を見にゆく人はかへりしもせじ」)

通釈に「遅く帰ってきたので」とあるが、「帰って来なかったの
で」である。「遅く…」は「(その時間になっても) …しない」の意で、歌でも「かへりしもせじ」と歌われている。20『貫之集全
積』の第七〇九番歌詞書の「遅くいでくるに」、同第八一八番歌
詞書の「遅く来れば」も、通釈にそれぞれ「遅く出来てきて」
「遅く行ったので」とあるが、「出来てこなかったの」「来なかつ
たので」である。

五〇八 ときは山こだかき松をはじめにてえださしそはれ千代のは
るばる

語釈に「それは」の「れ」を「る」(受身の助動詞)の命令形とするが、命令形は「れよ」である。これは自動詞四段の「添はる」(「増し加わる」の意)の命令形である。

五七四 雲の上へのぼらんまでもみてしがなつるの毛衣としふとならは

語釈で「てしがな」の「し」を「過去の助動詞「き」の連体形」とするが、願望の終助詞「しが」(前の「て」は完了の助動詞「つ」の連用形、後の「な」は詠嘆の終助詞)である。

2 『源道済集全釈』桑原博史(一九八七年六月)

七七 散りはててのちや帰らむふるさと忘られぬべき山桜かな
語釈に「ぬ」を打ち消しの助動詞として、忘れてしまうことができない、と解釈できそうだが、そのような解釈は絶対にできない。

4 『源重之集・子の僧の集・重之女集全釈』目加田さくを(一九八八年九月)

重之女集七四 よさのうみの風にまたげつり舟もかくなげかしき
おりはあらじな
語釈に「またげる」急ぐ、心がはやる、意のまたく。自動四、下

二。ここは下二」とあるが、四段である(下二なら連体形「またくる」となる)。なお第三音節、本文は濁音、語釈は清音になっている。『日国』は「またぐ」と濁音で立項。

5 『基俊集全釈』滝澤貞夫(一九八八年二月)

七五 人心なをたのみてみなせ河 せゞのふるぐひくちはてにけん

語釈に「けむ 既に……してしまった」として、「一人人の心は何を頼みとしたらよいのだろうか。水無瀬川の浅い瀬々の古杭は既にすっかり朽ちはて、しまったのだから。」という通釈をしているが、「けむ」は言うまでもなく過去推量である。八四番歌、一一七番歌の解釈・語釈をみても、本書の注釈者は一貫して「けむ」を過去推量と認めていないが、何かお考えがあるのなら、説明してほしい。

一六二 すもりごのいひいでぬことこのいぶせさに かひこめぐつる
みとや成なん

語釈に「かひこ 卵かひこ子。穀子」「めぐ 壊れる。破損する。下二段活用」として、「卵を壊せる身となるのであろうか。」と通釈をつけるが、下二段の「めぐ」なら「めげつる」の形にならなければならぬし、「めぐ」は自動詞なので採れない。これは『日国』

に「かいこめくつ【飼籠朽】（自タ上二）鳥などが、ずっと籠

中に飼われたままで死ぬ。転じて、家にこもって世に認められる
ことなく終わる。」とある通りで、この連体形である。

6 『定頼集全釈』 森本元子（一九八九年三月）

一四 し のびねのあかで明けぬるほととぎすうちとけにてん暮をこ
そ待て

語釈に「に」は完了「ぬ」の連用形、「て」は同じく「つ」の未
然形」という。その通りであるが、助動詞「ぬ」と「つ」の相互
承接はあり得ない形なので、本文を疑うべきである。例えば新編
国歌大観本は「うちとけはてん」に作る。

二三〇 ほどふとも人のつらさはかはらじをつもれる恋のたのまる
るかな

語釈で「るる」を「可能」とするが、自発であると思う。

7 『公任集全釈』 伊井春樹・津本信博・新藤協三（一九八 九年五月）

凡例によると本文を「歴史的仮名遣いに統一した」由であるが、
「むすびつけたまふける」（六詞書）のように、「給ふ」の連用形の
ウ音便が多く「ふ」で表記されている（「う」の表記の箇所もある）。

これが46箇所もあってとても気になった（いうまでもなく歴史的仮
名遣いは「たまうける」である）。

一 しづえにて声を惜しみしうぐひすは花のさかりを待つにぞあり
ける

通釈に「梅の下枝で声を惜しみながら鳴いている鶯は」とするが、
新日本古典文学大系に「下枝で声を惜しんで鳴かなかった鶯は」
とある通りであろう（少なくとも「鳴いている」は不可である）。

一三九 ほうりんにまうでたまふる、あらしの山にて

通釈に「法輪寺に参詣された折」とあるが、「参詣させていただ
いた折」である。ただし、下二段の「給ふ」が「思ふ・見る・聞
く・知る」以外の動詞に付くことは極めて稀なので、異同に掲示
されている「神・類」本の「まうでたまふ日」、あるいは新編国
歌大観の「まうで給ふ時」のような本文に従うべきだろう（公任
集は他撰で、公任に対する敬語は可）。

一七〇 詞書 せ伊勢守阿闍梨の、山よりたてまつれたる

通釈に「比叡山より人をして送ってよこした歌」とあるが、「人
をして差し上げた歌」である（せ伊勢守阿闍梨）は、「守」が
「字」の誤写で、「清照阿闍梨」という。二二八詞書、二二二詞
書、二二二詞書、四二八詞書なども、敬語が不訳出である。

一七一 山寒み雪まづ積もる宿のうへを白雲そふるすみかや見る

通釈に「山が寒いので雪が降り積もる宿のあたりを私は私はずもとから眺めながら、それと知らずに白雲がかかっている住まいと思っ
ていました。」とある。恐らく傍線部を「(私は) 住まいと見たの
だろうか」という「疑い」の文と解釈したのだろうが、推量の助
動詞を伴わない「…や(か) …連体形」は「問い」を表すから、
この傍線部は「(あなたは) 住まいと見るのですか」と解釈され
なければならぬ。

一七七 しら雪はとふことのはにかかりてぞ降りくる宿もはる心ち
する

通釈に「雪の降る我が家も明るく晴れる思いがします」とあるが、
それなら本文は「晴るる心ち」でなければならぬ。「晴る」は
下二段)。この「はる心ち」は名詞の「春心地はるこち」であろう。

四四三 あま人のりわたしけむしるしにや岩屋にあとをとどめ置
きけむ

通釈に「海人たちが舟に乗って仏の教えをもたらしてくれたしる
しであるうか、岩屋には仏の姿が明らかにとどめられていること
です。」とあるが、どうして過去推量を無視するのだろうか。私訳、
「海人たちが舟に乗って仏の教えをこの地にもたらしたというそ
のしるしとして、岩屋に仏像をとどめ置いたのだろうか。」

四五八 思ふどち寝てははかなくあくる夜を長しといふは人待つと

きの名にこそありけれ

語釈に「五七七、五七七からなる六句体の和歌」とあるが、読め
ばわかるように、「五七七七七」である。「五七七七七」の短歌
形態より一句多い歌体を旋頭歌といたので、『俊頼髓』、こ
の歌体は拾遺集五六五番歌にもみえる(「五七五七七」といっ
た歌体もある(例えば『隆信集』『為忠家初度百首』))。

三 『私家集全釈叢書』9～23について

本節では、「私家集全釈叢書」9～23巻について、語学の立場か
ら気付いた事柄について記す。

11 『本院侍従集全釈』目加田さくを・中嶋眞理子(一九九
一年七月)

五九 それならぬ事もありしを忘れぬといひしばかりをみみにとめ
けん

語釈に「否定助動詞「ず」の已然形」として、「私がいつか、「貴
下のこと、忘れられないわ!」といった事ばかり耳にとめてい
たんですねえ。」という通釈を付けているが、「ぬ」は完了の助動
詞「ぬ」の命令形だろう。「ほかのことも色々話したのに、「もう

逢わないで」と言った私の言葉ばかりあなたは耳に留めたのだらうか」といっているのである。

12 『相模集全釈』 武内はる恵・林マリヤ・吉田ミスズ（一九九一年二月）

三 うき鳥にみなとをいかではなれなむのりかよひける舟のたより
に

語釈に「はなれなむ 離れたいものです。「なむ」は終助詞で希望の意を表す」とあるが、終助詞の「なむ」は「くしてほしい」の意であって、「離れたい」なら「はなればや」である。この「なむ」は完了（強意）の助動詞「ぬ」の未然形に意志の助動詞「む」が付いたもので、「このみなどからどうにかして離れよう」の意であろう。

四八六 都にてさいはひくれば朝日山西ぎまにとくのぼりにしかな
語釈に「都に幸福が行くので、幸福と共に来る朝日は、朝日山のある西の地に、早く昇ってほしいものです。」とあるが、「にしかな」は通常自己の願望を表すので、歌意は、「都に幸福が行くので、朝日が山に昇るように、私も朝日山のある西の方の都の地に、早く上りたい。」である。

13 『殷富門院大輔集全釈』 森本元子（一九九三年一〇月）

一〇二 はらの池につららゐにけりうちむれてわたるあぎさのけさは下りゐぬ

通釈に「今朝は水面に下りていた」とするが、この「ぬ」は打消の助動詞「ず」の連体形である。「…の…連体形」の擬喚述法（連体形止め）で、歌意は「あぎさが今朝は水面に下りないコトヨ！」である。なお「あぎさ」は『日国』では「あきさ」と清音で立項する（水鳥の名称）。

15 『遍昭集全釈』 阿部俊子（一九九四年一〇月）

一五詞書 よのはかなさのおもひしられはべりしかば

語釈に「れ」は可能」とするが、自発であろう。

四二一 をりふするおよびの数はおほくともいまなくそぢもうつしてしがな

語釈に「てしがな」は、完了の助動詞「つ」の連用形「て」＋過去の助動詞「き」の連体形「し」＋願望の助詞「がな」とするが、「完了の助動詞「つ」の連用形「て」＋願望の終助詞「しが」＋詠嘆の終助詞「な」である。

16 『伊勢集全釈』 関根慶子・山下道代（一九九六年二月）

三三四 いたづらにたまる涙のつつまればこれしてけてと言はまし
ものを

語釈に「けて」は「消て」。下二段活用動詞「消」の連用形に助
動詞「つ」の命令形がついたもの」とするが、この「けて」は四
段活用動詞「消つ」の命令形である（語釈の通りなら本文は「け
てよ」である）。

18 『前長門守時朝入京田舎打聞集全釈』長崎健ほか（一九
九六年一〇月）

九二詞書 衣笠内大臣家に三百六十首歌を進じて、十首歌をえら
まらせける中に、故郷梅を

「まゐらせ」の「まゐ」に「(ママ)」と傍書し、「十首の歌をお
選び下さった歌の中に」という通釈を付けている。敬語の誤りと
いう判断かと思うが、「御覧す」の使役形「御覧せさす」が「尊
者が御覧になる」ように仕向ける「こと」から「お目にかける・御
覧いただく」の意になるように、この「まゐらす」は使役文「内
大臣家えに選らす」のいわゆる謙讓語（目的語「内大臣家」に対す
る敬意を表す）で、「内大臣家えに選ばせ申し上げる↓内大臣家え
を選んでいただく」の意になるのである。訳は「十首の歌を選んで
いただいた歌の中に」である。

一一七詞書 衣笠内大臣家へ三百六十首歌を進じて、十首を撰び賜
ひける歌の中に

通釈に「十首をお撰びいただいた歌の中で」とあるが、「賜ひ」
は尊敬語（主語に対する敬意を表す）であるから「十首をお撰
びくださった歌の中で」である。

20 『貫之集全釈』田中喜美春・田中恭子（一九九七年一月）

四〇八 川社しのにをりはへほす衣いかにほせばか七日ひざらん
通釈に「どのように干すからであろうか七日も乾かないようだ」
とあるが、「か…連体形」は文全体を疑問文にするのだから、「ど
のように干すから、七日も乾かないのだろうか」である。四五三
番歌、五一六番歌、五九四番歌、七三四番歌、七七七番歌、八七
六番歌、九一五番歌も同様である。^⑤

四三七 泊りてふこの所には来る人のやがて過ぐべき旅ならなくに
語釈に「過ぐべき」は、「人の」の「の」の影響で連体形。ここ
で文が終止する」というが、「来る人のやがて過ぐべきコトヨ！」
という擬喚述法（連体形止め）とみるのは無理ではないか。擬喚
述法の述語はモダリティを含むことができない。^⑥ この「べき」
は「旅」に係る連体修飾語であろう。田中氏は「旅であれば宿泊
してもよいが、そうではないのだから」「そのまま通り過ぎるべ

きだ」と読むが、私は「泊り」というこの場所は、来る人がすぐに通り過ぎなければならぬ旅の途次ではなく、「留まり」（終着地）なのに（それなのに、旅人はみな旅を終えずに通り過ぎて行く）のように読む。七〇一番歌「うちまよふ葦辺に立てるあしたづのよはひを君に波も寄せなん」も、「の」を主格助詞、「ん」を推量の助動詞の連体形とするが、無理だろう（「の」は連体格で、「なん」は謎えの終助詞であると思ふ）。

五九九 百千鳥鳴く時はあれど君をのみ恋ふる心はいつとさだめず
語釈に「時は決まっていなが」とあるが、「時は決まっているが」であろう。この句型は、「百千鳥鳴く時は「イツトサダメテ」あれど、君をのみ恋ふる心はいつとさだめず」という構造である。^⑦
六五九 君がため我こそ灰となりはため白玉章や焼けどかひなし
（詞書「人に、文やりける女の、いかがありけん、あまたたび返り事もせざりければ「やりつる文をだに返せ」といひやりたりければ、文焼きたる灰をそれとおこせたりければ、見てやれる」）
語釈に「なし」は、「や」の結び、連体形」とあり、通釈に「音無しの手紙は、「思ひ」の火で焼いても、効果なく、火も立たないことだ」とあるが、これでは二重に誤っている。説明のようであるなら、「なし」は「なき」でなければならぬし、傍線部全体が疑問文になるから、「白玉章を焼くけれども甲斐がないのか」

という通釈でなければならぬ。この「なし」は終止形であるから、「や」は係助詞ではなく、いわゆる間投助詞と考えるべきもので、

・庭も狭せに引きつらなれる諸人の立ちあまる今日や千代の初春（玉葉集・二）

などと同じものである。八五六番歌の理解も、同様に誤っている。

六七三 見る人もなくて我をばとはずともたそがれ時にはやもならん
語釈に「私をして訪れさせるといっても。「す」は使役の助動詞。

今、人目がないからといって呼びつけてくれても」とあるが、他動詞の被使役者は「に」格で表示されるので、それなら「我に訪はずとも」となるはずである。これは「我をばとはずとも」と読むべきではなからうか。

八二五 高砂の峰の松とや世の中をまもる人とや我はなりなん
語釈に「ん」は「や」の結びで連体形」とある。その通であり、それなら傍線部全体が疑問文になるはずで、通釈の「世間を見守り続ける人と私はなってしまうにちがいない」は不適切である。
「…人と私はなってしまうのだろうか」である。

八五六 方のみぞ春はありける住む人は花し咲かねばなぞや甲斐なし
語釈に「な」は「な」の結びで連体形」とある。その通であり、それなら傍線部全体が疑問文になるはずで、通釈の「世間を見守り続ける人と私はなってしまうにちがいない」は不適切である。
「…人と私はなってしまうのだろうか」である。

語釈に「や」の結びは連体形。↓六五九」として、「花も咲かず、出世もしないのでどうして春の方角の甲斐がないのでしょうか」という通釈を付けているが、「甲斐なし」は終止形であり、「なぞや」の結びではない。この「なぞや」は挿入句で、「花が咲かないので、なぜだろうか、甲斐のないことだ」の意である。

21 『橋為仲朝臣集全釈』好村友江・中嶋真理子・目加田さくを（一九九八年四月）

甲本・三四 あはぢしまあはれと見てやその神にあまくだりましあともたれけむ

通釈に「ずっと此地に鎮座しまして、お守り下さっておられるのでございましょう。」とあって、過去推量が無視されている。私訳、「淡路島をあわれと見て、その神がその当時、降臨して、衆生を救うためにこの世に現れたのだろう。」

23 『沙弥蓮瑜集全釈』長崎健ほか（一九九九年五月）

二三 あは雪の跡にぞしるき小松ばらたがねのひをかけさいそぐらむ

通釈に「春の淡雪の降り積んだ跡にもはっきりとしている緑の小松原では、…」とあるが、この歌は二句切れではないだろうか。

四二番歌も同様だと思う。

四 四つ仮名を異にする掛詞の指摘について

本稿の対象とした『私家集全釈叢書』の24冊中に、四つ仮名を異にする掛詞の指摘が二箇所みられたので、ここでコメントしておきたい。一つは1『赤染衛門集全釈』の一八九番歌、

①あはじてふみちにだにこそあふと聞けただにてすぎん人のつらさよ

で、語釈に「「会はじ」と「淡路」の掛詞。「じ」と「ぢ」の違いを問題にする必要はなからう。」とある。もう一つは、4『源重之子の僧の集・重之女集全釈』の重之集六一番歌、

②みづうみのあはづにやどる君ゆへにはかなくしほをたれてけるかな

で、語釈に「○みづうみの―粟津の枕詞、ここは淡水湖の琵琶湖をさす。水と見ず懸詞。○あはづ―粟津と逢わずの掛詞。」とある（両者で「懸詞」「掛詞」と表記を変えている理由はわからない）。

四つ仮名は、中古には別音であったが、たしかに類音の掛詞として通用した例がわずかにある。遠藤邦基「四つ仮名と掛詞修辞」（同氏『国語表現と音韻現象』新典社・一九八九年）には、「宇治―

憂し」「淡路―淡し」「粟津―逢はず」の掛詞の例が存在することが示されている。この中で「淡路―逢ハジの例を見出しえなかった」（二六一頁）と述べられているが、右の①はその例ということになるか。ただ①の場合、「淡^{あは}してふみち」で「淡路」を表していて、「会はじ」という、「淡し」という道（＝淡路）でさえもというように語音を掛けているとも考えられ、そうであるなら①の傍線部は「逢はじ」と「淡し」の掛詞という通常の（つまり仮名を異にしない）掛詞ということになる。②については、「粟津―逢はず」の掛詞は認められるにしても、四つ仮名を異にする掛詞は「あくまで類音異義語」であり、「大半が地名との関連性をもち」「表面的な意味に地名を用い、連想さるべき語彙がその仮名づかいを異にしている」（遠藤氏同書、一六三頁）という特徴を考えると、「水^{みづ}」と「見ず」まで掛詞と認めるのは行き過ぎかと思われる。

五 おわりに―古典和歌の解釈ということ―

私にとって「私家集全積叢書」は、古典文の用例を調査する上でたいへんありがたい存在であった。しかし、これを通読してたいへん奇異に感ずるのは、どうして、何を目的として、助詞・助動詞等を正確に訳出しないのだろうか、ということであった。本文中にも述

べたように、例えば、7『公任集全釈』の四四三番歌の「(…)や…とどめ置きけむ」には、「明らかにとどめられていることです」という通釈が付けられている。原文には疑問の助詞と過去推量の助動詞「けむ」とが用いられているのであるが、これを原文の通りに「…とどめ置いたのだろうか」と訳すと、何か不都合なのだろうか。

例えば『古今集』の一―六番歌、

・春の野に若菜摘まむと来^しものを散りかふ花に道はまどひぬ

を、「春の野に若菜を摘もうとやってきたのに、散りまがう花に道がわからなくなりました。」（角川文庫新版訳）のように解することは、「き」の用法から認められないが、この判断には中古の「き」が発語当日中の過去を表さないといい、古典語のテンス体系の理解が必要で、このような問題については古典語学の側が古典文学側に知見を提供してゆく必要がある問題である。

しかし、「けむ」が過去推量であるなどということは、古典文学研究者の全員が重々承知している事柄であろう。重々知っているが、故意に正確な訳を回避しているわけなのだが、これが一体何を目的としてしているのだろうか、という疑問は、私には今もって分らない。

和歌は韻文であり詩^{うた}であるから、現代語訳はなじまない、ということとは分らないでもない。しかし、例えば、

・秋にあへずさこそはくずの色づかめ あなうらめしの風のけしき
や

の5『基俊集全釈』の通釈「秋の季節にはかなわないで、いくら神域だからといって、葛の葉が色を変えないことが有るのだろうか。」は、これを正確に「秋に堪えきれずそのように葛の葉が色づくのだろうか」と訳したら何か都合なのだろうか。現代の我々の理解のために、原文にはない反語の意がどうしても要請されるということでもないようである。どうして文法的に正確な訳を故意に回避するのかわかることは、私にはどうしてもわからない。

古典和歌の注釈書はこれからも刊行され続けるだろうが、和歌文学研究者の間で、古典和歌の通釈のありかたについて議論し、共通理解をもつことは必要なのではないだろうか。もちろん、古典文学を専攻する者としては、古典文の解釈は、古典文法の枠内で正確になされることを強く願うものである。

注

(1) 平成二十六年十月に、某国立大学の国文学専攻の三・四年生に、この本の誤りを示して訂正させたところ、半分位しか訂正できなかったから、影響はやはり大きいだろうと思う。

(2) 拙稿「疑問詞の結び」『岐阜聖徳学園大学紀要』49集・二〇

一〇年。

(3) 例「夜明けぬれば、介、朝遅く起きたれば、郎等粥を食はせむとてその由を告げに寄りて見れば、「介ハ」血肉にて死にて臥したり。」(今昔物語集25—4)。岡崎正継「御導師遅く参りければ」の解釈をめぐって『今泉博士古稀記念国語学論叢』桜楓社刊・一九七三年。

(4) 岡崎正継『国語助詞論攷』おうふう刊・一九九六年。

(5) この問題に関しては、別稿を予定している。

(6) 「の：らむ(けむ)」の句型は擬換述法ではないから別である。また、

・時しもあれ秋やは人の別るべきあるを見るだに恋しきものを
(古今集・新日本古典文学大系・八三九)

・絶えず行く飛鳥の河のよどみなば心あるとや人の思はむ(同・
七二〇)

のような疑問文中の「：の：：べき」「：の：：む」は可能である(この「べき」「む」は疑問の係助詞の結びとしての連体形なのであって、擬換述法ではない)。近藤泰弘「△結び▽用言の構文的性格」『日本語学』5—2・一九八六年、拙稿「三代集における主節中の主格の「の」について」『岐阜聖徳学園大学紀要』53集・二〇一四年、参照。

(7) ①「今こそあれ我も昔は男山さかゆく、時もあり来しものを」

(古今集・八八九)、②「昔のことどもこそ侍れ、おはします人の御事申す、便なきことなりかし。」(大鏡)が、①「今こそ「さかゆく時もなくて」あれ」、②「昔のことどもこそ「便なきことならず」侍れ」のように補われるのと同じ構造である。

(8) 拙稿「古典文における使役文・受身文の格表示」『岐阜聖徳学園大学紀要』42集・二〇〇三年。

(9) 「関越えて粟津の森のあはずとも清水に見えし影を忘るな(詞書「あひ知りて侍りける人の近江の方へまかりければ」」(後撰集・新日本古典文学大系・八〇一)という明確な例がある。

(10) この歌は、「以前、初春に来たことがあるが、桜が満開の今は」と読まなければならない。例えば新日本古典文学大系訳、「春の野で、若菜を摘もうと思って来たことがあるが、今は散り乱れる花に心が乱れて道にまよってしまった」。

(11) 「歌によりて、もとの語のつゞきざま、てにをはなどにもかゝはらず、すべての意をえて譯すべきあり、もとの詞つゞき、てにをはなどを、かたくまもりては、かへりて一うたの意にうとくなることもあれば也」(本居宣長『古今集遠鏡』例言、筑摩版全集③七頁)

(12) こうした状況は、本叢書の後の巻でもあまり変わっていないようで、一例を示せば、二〇一二年三月刊の38『御堂関白集全』では、

・三笠山雪やつむらんと思ふまに心のそらに通ひぬるかな(四)の通積が「雪が降り積むであろう」となっている(道長が、春日使に行った頼道を案じた歌)。どうして「今ごろ雪が降り積んでいるだろう」と解釈しないのだろうか。